

## 自由廃業運動と流行唄

### —ストライキ節・東雲節を中心に—

林 葉 子

本稿は、1900年以降に全国的に大流行したストライキ節（東雲節）に関する史料の検証を通じて、娼妓や芸妓にとっての自由廃業運動の意義について考察するものである。

ストライキ節の発祥地については、これまで熊本か名古屋だと論じられてきたが、本稿では、東京が発祥の地であったことを明らかにした。また、先行研究では添田啞蟬坊ら演歌師がストライキ節を流行させたと論じられてきたが、本稿では、演歌師ではなく娼妓や芸妓ら無名の女性たちがストライキ節の流行の主要な担い手であったことを指摘した。

ストライキ節は娼妓や芸妓らによる性の自由を求める表現であり、その声こそが自由廃業運動を根底で支えた原動力であった。

#### はじめに—解放の当事者の唄に着目する意義

1899年10月、遊廓から娼妓が合法的に脱出できるようにするためのユリシイズ・グラント・マーフィーらによる自由廃業訴訟が始まり、翌年の夏から数ヶ月の間に、娼妓や芸妓の廃業を支援する自由廃業運動が日本全国に広まった。その支援活動については、救世軍の人々をはじめ数多くのキリスト教徒が関与したことが知られており、研究も進められてきた。しかし解放の当事者である娼妓や芸妓が自由廃業運動をどのように捉えてきたのかという点については、これまでほとんど研究が行われてこなかった。本稿は、同時代の<sup>はやりうた</sup>流行唄を手がかりに、娼妓や芸妓の遊廓観を捉え、自由廃業運動の意義について再考するものである。

自由廃業運動と連動して全国的に大流行した唄としては、ストライキ節や<sup>しのめ</sup>東雲節が知られている（以下、本稿では両者を併せてストライキ節と表記する）。また後述のように、ストライキ節以外にも自由廃業運動の影響で作られた唄があった。当時の流行唄は、別の唄の歌詞を再利用したものが多く、<sup>はやしことば</sup>囃子詞の部分の替えただけの唄もしばしば作られた。ストライキ節も同様に、一から創作されたものばかりではなく、古くから歌

い継がれた歌詞を繰り返しただけのものもあった。次の2つはストライキ節の代表的な歌詞として知られているが、やはり古い都々逸が再利用された例である。

何をくよくよ川端柳<sup>かわぼたやなぎ</sup> コガル、ナントショ 水の流を見てくらす<sup>ながれ</sup>  
東雲ノストライキ 去<sup>さ</sup>リトワつらいネツテナ事ヲツシャリ<sup>まし</sup>升タネ<sup>1)</sup>

丸い玉子も切りやうで四角、こがる、何<sup>なん</sup>としよ、物も言<sup>いひ</sup>ようで角が立つ、  
東雲のストライキ、さーりとは辛いね、テナコト、ヲツシャリマシタカ子<sup>ネ</sup><sup>2)</sup>

これらは、ストライキ節のごく一部に過ぎない。「こがる、何としよ」「さーりとは辛いね、テナコト、ヲツシャリマシタカ子<sup>ネ</sup>」の部分が、ストライキ節独自の囃子詞として、替え唄の中でも繰り返し使用され、その他の箇所が新作された。当時の流行唄は次々に替え唄が作られたので、ストライキ節についても、本稿で史料として用いた唄本に収録されたものだけで309の唄を確認している。そしてそれらの内容を分析してみると、そこに表現された「自由廃業」への思いは、廃娼運動家のそれとは異なっていたことに気づかされるのである。

廃娼運動の一戦略でもあった自由廃業運動について、廃娼運動の担い手たちは、その運動が目指す「解放」を、娼妓や芸妓たちが当然歓迎すると信じていた。実際、その支援活動を歓迎して、自ら廃業の意思を手紙等で伝えて助けを求めた娼妓がいたことも事実である<sup>3)</sup>。しかし、全ての娼妓や芸妓が廃娼運動家の論理に沿って自由廃業を求めていたわけではなかった<sup>4)</sup>。廃娼運動家が強調していた社会主義的な視点やキリスト教信仰を背景とする「純潔」の重視、衛生論の観点からの検閲制度批判などは、必ずしも娼妓や芸妓らの主要な関心事にはならなかったのである。本稿では、廃娼運動を率いた人々と娼妓や芸妓との間にどのような認識の相違や共通点があったのかという点に特に着目して、ストライキ節の流行という事象を捉えたい。

ストライキ節の流行とその背景については、これまで長く論じ続けられてきたものの、不明確なままに残された論点が多い。本稿は特に、①ストライキ節の発祥地、②ストライキ節の作者と流行の担い手、③ストライキ節の歌詞の意味の3点を中心に、ストライキ節の流行に関する史料の検証を通じて、娼妓や芸妓にとっての自由廃業の意義について考察するものである。

第1の論点であるストライキ節の発祥地については、特に論争の歴史が長く、ほぼ全

ての先行研究がその点に論及しているが、確かな史料裏付けのある結論には至っていない。ストライキ節の発祥地は熊本だという説（以下、熊本説）と名古屋だという説（以下、名古屋説）に分かれ、それら以外の第3の可能性については論じられてこなかった。しかし本稿の1では、熊本でも名古屋でもなく、東京がストライキ節の発祥地であることを立証する。

第2の論点については、これまで、添田知道の説に基づき、その父親の添田啞蟬坊や彼の周辺の演歌師たちがストライキ節を流行させたと論じられてきた（以下、添田説）。しかし本稿の2ではその添田説の矛盾と誤謬を指摘し、ストライキ節の替え唄が作られる過程には、演歌師よりも娼妓や芸妓ら無名の女性たちが強く関与したことを指摘する。

第3の論点は、ストライキ節が結局のところ何を訴える唄であったかという本質に関わる問いである。先行研究の中には、添田説と関連させ、ストライキ節は貧困の辛さを訴えたり汚職等の不正を糾弾したりした唄であったと捉えて、男性中心の無産者運動史の枠組みの中で解釈しようとするものもあった。しかし、ストライキ節が流行しはじめた1900年から1901年にかけて刊行された唄本に掲載された歌詞のほとんどは、貧困問題そのものではなく、娼妓や芸妓らの間夫に対する恋愛感情と結婚願望を表現したものであった。そしてそのような内容ゆえに、それらの唄は当時の研究者から「鄙猥下劣なるもの」と蔑視され、「恋愛を歌ふ他に出づることなし」と低く評価されていたのである<sup>5)</sup>。しかし本稿は、自由な性的関係の構築を望む娼妓や芸妓らの声こそが、全国へ波及した自由廃業運動を根底で支え続けた変革の力であったと捉えるものである。本稿の3では、そのようなストライキ節の歌詞の内容を紹介し、そこに唄われた女性たちの願いと自由廃業運動との関係について分析する。

## 1 東京から広まったストライキ節・東雲節

ストライキ節（東雲節）の発祥について、事典類や概説書での記載箇所には、熊本説と名古屋説の2説を併記するものが多い。たとえば『日本民謡辞典』（1972年）の「東雲節」の項目には次のように記されている。

明治<sup>[ママ]</sup>31年、名古屋の娼妓東雲<sup>[ママ]</sup>（本名、佐野<sup>[ママ]</sup>ふみ）が楼主の圧迫に耐えかねて脱走したときの流行唄だとか、熊本の女郎屋東雲楼（名古屋の東雲楼だとの説もある）

で遊女のストライキがあったときに、うたい出されたものだとかいられている。特に熊本発生説が信じられて、熊本民謡に数えられていることもある。しかし、実際は（中略）ある事象に取材して作られた唄が、流行唄となって地方地方に定着したものと考えられる<sup>6)</sup>。

この項目の内容には誤りが多く、最初の自由廃業訴訟の娼妓の娼妓名は「東雲」ではなく「小六」であり、本名は「佐野ふみ」ではなく「佐野ふで」であり、その自由廃業訴訟は明治31年ではなく明治32年であった<sup>7)</sup>。

ただ、ストライキ節が「熊本民謡に数えられていることもある」のは事実である。1931年刊行の『熊本案内』には、熊本市の二本木遊廓（南廓）についての案内文の中に「シノメノーストライキー（中略）の俗謡は我が國労働争議、同盟罷業の嚆矢と称せられてゐるが、この東雲楼の娼妓の約半数四十餘名が一時に廃業した騒ぎを唄ったもの」と記されている<sup>8)</sup>。1959年刊行の『唄の観光 肥後民謡』は、熊本県知事と熊本市長による序文を付して初の本格的な肥後民謡集として刊行されたものであるが、この書籍も「東雲節」を熊本地方の民謡として位置づけ、熊本の東雲楼の楼主・中島茂七の子である茂八の話に基づき、「東雲節」は1899年末の東雲楼での自由廃業事件を発端としたもので「熊本に於て創作されたものであることを断言する」と述べている<sup>9)</sup>。

しかし『九州日日新聞』によれば、二本木遊廓で初めて自由廃業の届けが出されたのは1900年9月27日のことであり、それは東雲楼ではなく玉新楼の娼妓らによるものであった<sup>10)</sup>。東雲楼（日本亭）については、同年11月6日になって、ようやく「自分の店ばかりは決して自由廃業はないと威張っていた流石の日本亭も近頃続々廃業者を出すに至れり<sup>11)</sup>」と報じられている。

熊本説は、すでに1902年の平出鏗二郎による『東京風俗志 下の巻』に現れていた。そこには「東雲節は熊本の東雲といふ妓楼にて娼妓の同盟罷業ありしより、この歌九州に専ら行はれしに<sup>12)</sup>」と記されている。こうした熊本説を広めたのは、沖野岩三郎『娼妓解放哀話』（1930年）だったと考えられる。沖野は同書に「東雲のストライキ」と題する一章を設けている。この章は沖野自身ではなく江藤新平の孫である江藤幸一の調査に基づく解説であった<sup>13)</sup>。沖野は、その江藤の調査は『九州日日新聞』の記事に基づく事実だとしながら、二本木遊廓の東雲楼における自由廃業が「東雲ぶし」の流行の最初のきっかけであって、東雲節の「原歌」は「祇園山から二本木見れば 金はなかしま（中島） 家も質（茂七） 東雲のストライキ さりとはつらいね てなこと仰しゃいま

したかね」というものであったと記している<sup>14)</sup>。また『娼妓解放哀話』文庫版の解説(1982年)を執筆した竹村民郎もこの沖野の熊本説を支持し、二本木遊廓における「東雲のストライキの年月」は1900年12月頃ではなかったかと推定している<sup>15)</sup>。

しかし最近の先行研究において、そのような熊本の東雲楼における集団的な自由廃業が『九州日日新聞』で報じられた事実はなかったことが確認されている<sup>16)</sup>。後述のとおり、東京でストライキ節(東雲節)の流行が報じられたのは1900年10月のことであるから、同年12月に熊本で「東雲のストライキ」と呼ばれる事件があって、それがストライキ節の全国的流行の発端となったという竹村の説の信憑性も低い。

『日本民謡大事典』(1983年)は、熊本説と名古屋説の2説を併記して紹介しながらも、熊本説の「根拠は薄弱」であり「廃娼運動がようやく活発化した明治三十二年頃、名古屋在住のモルフィ神父と救世軍の山室軍平らがはじめた自由廃業運動や、政界の汚濁を弥次ってはやらした演歌の一種とすべきであろう」と名古屋説と添田説を併せた見解を述べている<sup>17)</sup>。

名古屋説を広めたと考えられるのは、藤澤衛彦の流行歌史研究の一連の著作である。藤澤は1914年に刊行された『流行唄変遷史』で「東雲節の囃子詞については、文政九年秋名古屋清壽院の願人の唄った囃子の「うとめがつらい」に起因するものではないかと疑はれるものがある」(傍点原文)と述べ<sup>18)</sup>、1929年の時点で、「名古屋に於ける東雲楼の娼妓の自由廃業に因んだ、東雲節」と紹介している<sup>19)</sup>。ただし名古屋の最初の自由廃業訴訟の娼妓が所属していたのは、東雲楼ではなく松坂楼であって<sup>20)</sup>、ここにも基本的な事実についての誤認がある。

上記の他にも、ストライキ節の発祥地について論じた先行研究は多数あるが、それらは熊本説と名古屋説の2説のみに着目してきた。そのため筆者は、最初にこれらの先行研究の真偽を確かめるため、U. G. マーフィーによる自由廃業訴訟が始まった1899年10月から約2年間の熊本の『九州日日新聞』と愛知の『扶桑新聞』『新愛知』、および、救世軍の支援による自由廃業運動の広まりの始点である東京の状況について、東京で発行された新聞を中心に調査した。

その調査の過程で発見したのは、名古屋説が誤りであることの根拠となる下記の1900年10月19日の『新愛知』の記事である。

新吉原の流行唄 昨今東京新吉原にて頻りに行はるゝ唄といふは本調子にて  
「逢たがるのに逢せぬ奴は、<sup>こが</sup>焦るゝナントせう、鬼か蛇かしら人でなし、遊び女の

ストライキ、<sup>さり</sup>然とは辛いねってな事仰いましたよ<sup>21)</sup>

この記事は、名古屋ではなく東京で流行している唄として「焦る、ナントせう」「然とは辛いねってな事仰いましたよ」というストライキ節特有の詞が入った流行唄を、愛知県とその近辺の読者に紹介したものである。つまりこの記事からわかるのは、1900年10月の時点では、まだ名古屋ではストライキ節が流行っておらず、東京の流行唄だと認識されていたということである。またこの記事では「東雲のストライキ」ではなく「遊び女のストライキ」と紹介されていることから、当時の名古屋においては「東雲」の箇所がさほど重視されていなかったこともわかる。

この『新愛知』で示された東京の流行唄としてのストライキ節という認識は、東京で発行された新聞の記事にも見出すことができる。下記の『二六新報』の1900年10月29日の記事は、先行研究では見落とされてきたが、東京での流行の経緯を知るための重要な手がかりである。『二六新報』の記者たちは自ら自由廃業運動の中心的な担い手となっていたため、自由廃業に関する事柄への関心はきわめて高かったと考えられ、この報道の信憑性は高い。

古人童謡を聴いて時勢の趨く所を察したといふのは尤もな事で、本紙なども其の意味から折々時の流行唄を紹介した訳であるが、此頃殊に感じたのは例の「しのゝめのストライキ」と云ふ唄ぢや▲此唄の盛んになり始めたのは恰度此七八月頃即ち娼妓自由廃業問題勃興の少し前である、ソレ迄は例のサノサ節と云ふのが流行を極めて居つたのである▲しのゝめのストライキとは何の事やら一向訳の解らぬ下らぬ唄とのみ聴きよつたが、如何さま今日になりて考へて見ると少くとも娼妓自由廃業の先容であつたことが解る▲「東雲」は娼妓の名前にヨク有るヤツさうナから、暗に娼妓の同盟罷業を示してある、加るに「サリとは無常い子」とあつて如何にもヨク娼妓の境遇を語つて居るらしくあるではないか<sup>22)</sup>

この記事では、ストライキ節の流行が1900年7月から8月にかけての時期に始まり、それは「自由廃業問題勃興」の「少し前」であったと紹介されている。自由廃業運動は、1899年10月、前述のように、名古屋のU. G. マーフィーらが支援した佐野ふでの自由廃業訴訟の開始を起点の一つとして既に始まっていたが、自由廃業運動が全国的に知られるようになったのは、1900年8月中旬以降、東京を起点として始まった救世軍

の自由廃業支援の動きが全国各地の新聞で大々的に報じられるようになってからだった。ストライキ節はその東京から全国へと広がる報道に少し先駆けて唄われ始めたというのである。この記事はストライキ節が東京の流行唄だと特記するものではないが、『二六新報』が東京の新聞社であることを考え併せるならば、この『二六新報』のストライキ節流行についての記事は、東京での事象を報じたものだと考えるのが自然である。

またこの『二六新報』の記事において「東雲のストライキ」の「東雲」が娼家の名前ではなく、娼妓一般を意味している点も重要である。先行研究においては「東雲」が、もっぱら娼家（「東雲楼」等）の名前だと捉えられ<sup>23)</sup>、それが熊本の東雲楼だったか、あるいは名古屋の東雲楼だったかと、長らく議論が続けられてきた。しかし「東雲のストライキ」の「東雲」は、場所や団体の名前ではなく、人（娼妓）を指すものだというのである。実際、「東雲」は娼妓名として使用されることが多く、『二六新報』でも「東雲」という名の娼妓が他の娼妓たちと連れ立って交番へ駆け込み自由廃業を遂げた事件が大きく取り上げられたことがあった<sup>24)</sup>。前述の『新愛知』の記事の中で「東雲のストライキ」が「遊び女のストライキ」と置き換えられているのも「東雲」=「遊女」だからだろう。

ストライキ節の中の娼妓「東雲」は、もともとは娼妓一般のことではなく、吉原遊廓に実在した一娼妓のことだったと報じた記事もある。1901年4月に刊行された『婦人と子ども』という雑誌は、次のように論じている。

東雲のストライキ云々の歌詞、一向に分らず、さりととは、何の意味なるかとさまざま考へたる結果は、次の原由のあることを聞き出したり。一時、自由廃業の盛なりしころ、芳原の一娼妓東雲と呼ぶ者、廃業を思ひ立ちて、交番にかけこみしに、手続に手落ありとて、警官より楼に帰らんことを、説諭せられし折、彼は涙に咽びて、「帰るは帰るが、さりととは辛いねー」と語りしとか。之より遂にストライキ節となりて、今や全国の丁稚小僧より堂々たる紳士令嬢に至るまで、口にせざるなきに至り、さしも流行を極めたりし大和田氏の鐵道唱歌も之がために圧倒せられて、後に撞若たり<sup>25)</sup>。

この記事においても、ストライキ節は東京（「芳原」=吉原遊廓）から広まり「全国の丁稚小僧より堂々たる紳士令嬢に至るまで、口にせざるなきに至」ったと論じられてい

る。ストライキ節の「さりとて辛いね」が、警官によって自由廃業が妨げられたことに対する娼妓の悔しさを表した言葉だと捉えているのも、当時の新聞では実際に警察による自由廃業妨害の報道が多かったことから、確からしい推定であるといえる。

1900年12月7日には、ストライキ節の唄本『ストライキ志の、め節』が東京で刊行された。その序文には「今度発行したる東雲節は目下花の都の大江戸に専ら流行を極めつゝある浮世節」（傍点筆者）と説明されており<sup>26)</sup>、そのこともまた、ストライキ節は東京発祥だと考える本稿の推論を裏付けるものである。1901年1月15日発行の別の唄本では、ストライキ節が「京大坂を股にかけて、江戸っ子の吉粧を顕」わしたもので（傍点筆者）、東京の唄であるそれらが、すでにその時点で関西へも広まっているという認識が示されている<sup>27)</sup>。ストライキ節の唄本は、これらを含め、複数刊行されており、本稿の3では現存を確認している5冊を史料として用いたが、それらは全て東京で刊行された唄本である<sup>28)</sup>。なお、それらのうちの4冊は同志社大学人文科学研究所に所蔵されている【図】。

図 自由廃業運動の初期に刊行されたストライキ節の唄本（同志社大学人文科学研究所所蔵）



『九州日日新聞』で初めてストライキ節の流行が報じられたのは1900年12月9日のこと<sup>29)</sup>、その記事には「近頃はストライキ節が大流行ぢや」（傍点筆者）と記されていた<sup>30)</sup>。つまり同年秋の東京での報道よりも2ヶ月以上遅れて、熊本でのストライキ節の流行が報じられたのである。しかも『九州日日新聞』で紹介された熊本のストライキ節は、東京の唄では「てなこと仰いましたね」となっている部分が「ヨッケナコトオツシャイマシタカ子」という言い回しになっている<sup>31)</sup>。全国的に流行したのは「てなこと仰いましたね」の方であるため、そのことから、熊本説は誤りであると言える。

上記の通りストライキ節は、熊本でも名古屋でもなく東京を起点として全国に流行していった唄だったことが複数の史料から確認できたが、さらに遡ってストライキ節の音楽史的なルーツを探るために、1890年代から1901年頃までに刊行された唄本や楽譜を用いて歌詞を分析したのが【表】である。

表 歌詞の変遷

刊行年月日	曲名	類似する歌詞	掲載された本	発行所	販売所
1892年3月23日	(古今流行唄 (慶應年間))	なにをくよくよ川ばた柳、水の流れを見て暮す、 ヒヨコホイホイ	戯笑散人編『粋の自慢 博識天狗』藤谷伊助	大阪市	
1892年10月10日	鈍呑(どんどん)節	まるいたまごもきりよでしかく どんどん もの もいよでかどがたつ たいちよかね そかねど んどん	永井岩井『日本歌曲集 西洋楽譜 一名・日本俗 曲集続編』	大阪市	大阪、東京
1893年7月5日	どんどん節	なにをくよくよかわばたやなぎ ドンドン みづ のながれをみてくらす たいちよかねそかね ド ンドン	池田武次郎『西洋楽譜流 行端歌俗曲集 一名・風 琴独習の友』熊谷久榮堂	神戸市	
1893年7月25日	どんどんふし	なにをくよくよかわばたやなぎ ドンドン みづ のながれをみてくらす タイチヨカネソカネ ド ンドン	箸尾竹軒『手風琴獨案 内』青木嵩山堂	大阪市	東京、大阪、神 戸、京都、名古 屋
1893年12月27日	相模甚句唄	エー何をくよくよ川ばた柳水の流れを見てくらす	新井清次郎・柏原由二編 『手風琴独奏自在』蔡光 堂出版	大阪市	大阪、東京、名 古屋、京都、神 戸、岡山、長 門、広島、博 多、熊本、鹿児 島、徳島
	浪花流行ギッ ション	何をくよくよ川ばた柳ギッションチョンチョン水の 流れを見てくらすオヤマカドッコイドッコイ ヨーイヤサ			
1894年12月30日	ギッションチ ョン	丸い玉子も切りよふで四角ギッションチョン、ギ ッションチョンものも言ひよふで角がたつオヤマ カドッコイドッコイ、ヨーイヤサ、ギッションチ ョンチョン	井上定吉『藝者虎の巻』 井上定吉	東京市	
	ウントコ節	何をくよくよ川端やなぎみづの流れをーウントコ ドッコイ、デレスケサン、キナハツタカ、シーヤ ットコイナンダイ見てくーらす			
1898年6月30日	川ばた柳	何をくよくよ 川ばた柳さ、水の流をサツコラサ ノサ見てくらすセッセセ	吉岡勇次郎『獨習自在手 風琴雜曲集』岡本書店	大阪市	大阪、京都
1898年10月5日	どんどん節	圓い鶏卵も切りよで四角、ドンドン、しててか寝 ててかほんまかへ、ジツ、おまつりや、あけなき や、ドンドン	後藤新吉(露溪)『音曲 全書 銀笛獨案内』大阪 音楽会	大阪市	
1898年10月20日	どんどん節	圓い鶏卵も切りよで四角、ドンドン、しててかね ててかほんまかへ、ジツおまつりや、あけなき や、ドンドン	後藤新吉(露溪)『音曲 全書 明笛』大阪音楽会	大阪市	
1898年10月28日	サイノ節	圓い鶏卵もヤツコラヤノヤ、切り様で四角、ノー チヨサン物も言ひ様で角が立つ、サイノ	後藤新吉『尺八獨稽古』 岡本偉業館	大阪市	
1899年4月28日	風にまかせて	かぜにまかせてかばたやなぎーみづのながれを みてーくらす	桃井静軒『手風琴獨奏』 又間精華堂	大阪市	
1900年9月17日	隊長かね	何をくよくよ川ばた柳、ドンドン、水の流れを見 て暮す、隊長かね、そかねドンドン	山田要三『月琴』又間精 華堂	大阪市	
1900年12月7日	ストライキ節	何をくよくよ川端柳 コガル、ナントシヨ 水の 流を見てくらす 東雲ノストライキ 去リトワつ らいネ ツテナ事ヲツシャリ升タネ	鈴木武三郎編『ストライ キ志の、め節』文友堂	東京市	
1900年12月20日	ストライキ節	何をくよくよ川ばた柳 別れが何んとしよ 水の ながれを見てくらす 東雲の明鴉 さりとは辛い 子 てなこと仰有ましたよ	大高榮編『新版ストライ キ節』大高榮	東京市	
1901年1月20日	ストライキ節	何をくよくよ河端柳 コガル、ナントシヨ 水の 流を見てくらす 東雲のストライキ さりとは辛 いね テナコトヲツシャイマシタカ子	鈴木與八編『当世流行ス トライキ節』鈴木與八 (盛陽堂)	東京市	
1901年5月15日	ストライキ節	トテチンチリ、トテチン、圓い鶏卵も切り様で四 角、焦がるゝ、何んとしよ、物も言ひ様で角が立 つ、東雲のストライキ、さりとは辛い子、チリ リンシャン	後藤新吉『音曲全書 銀 笛流行俗曲 附唱歌軍 歌』又間精華堂	大阪市	

1901年 5月19日	ストライキ節	なにをくよくよかわばたやなぎ こがるるなんと しよ みづのながれをみてくらす しののめのス トライキ さりとはつらいねってなことおっしや いましたね	山田縫三郎『吹風琴獨案 内』(増補再販)	東京市	
1901年 7月25日	ストライキ節	なにをくよくよかわばたやなぎ こがるるなんと しよ みづのながれをみてくらす しののめのス トライキ さりとはつらいねってなことおっしや いましたね	西村寅次郎『吹風琴獨 まなび』(増補) 東雲堂書店	東京市	
1901年 8月 4日	ストライキ節	なにをくよくよかわばたやなぎ こがるるなんと しよ みづのながれをみてくらす しののめのス トライキ さりとはつらいねってなことおっしや いましたね	成育楽人『新撰吹風琴獨 案内』 盛林堂	東京市	
1901年 8月10日	何をくよくよ	何をくよくよ川端柳水の流れをセンチ又見て暮 す、丹後の宮津……	秋庭鏡司『月琴胡琴明笛 獨稽古』 大阪用達合資会 社	大阪市	

この表に示した史料からわかるのは、ストライキ節の歌詞の一部として現在まで伝えられている「何をくよくよ川端柳…水の流れを見て暮す」は、もともと慶應年間の流行唄だったと伝えられており、1890年代には、どんどん節、相模甚句唄、浪花流行ギッチョン、ウントコ節、「川ばた柳」、「風にまかせて」、「隊長かね」等の流行唄の中で、何度もアレンジを加えながら繰り返し使われていた詞だということである。「丸い卵も切り様で四角…物も言い様で角が立つ」も同様に流行唄の中で使われ続けた歌詞であった。

当時の流行唄は、囃子詞の部分が変更されて別の唄が作られていったが、「ドンドン」「ドッコイドッコイ」等、調子をとるために使われた囃子詞は、元々そこに何らかの意味があったとしても、ほとんどその意味は意識されずに唄われるようになっていったと考えられる。ストライキ節に特有の「東雲のストライキ さりとは辛いねってなことおっしやいましたね」という箇所も、その囃子詞にあたるものであり、最初こそ自由廃業運動が強く意識されて作られたのだとしても、やがて形骸化していった。

【表】では、歌詞と発行された場所との関係に着目されたい。もともと流行唄の楽譜は大阪で刊行されたものが多いが、ストライキ節の唄本は、前述のとおり東京で発行された。1901年5月15日には、大阪で刊行された楽譜集にもストライキ節が掲載されたが、その歌詞の最後は「さりとは辛い子、チリリンシャン」となっており、ほぼ同時期の東京の楽譜集の中のストライキ節の歌詞が「さりとはつらいねってなことおっしやいましたね」となっていることと併せて考えれば、全国的に流行したストライキ節の原型は、大阪でもなく、やはり東京で作られたのだと考えられる。

## 2 流行唄の作者とその流行の担い手

上記の【表】からもわかるように、明治期の流行唄は、既存の唄の替え唄として次々に作られたため、それらの作者を特定することは難しい。当時の流行唄は、現代の流行歌のように作曲家や作詞家が明示されておらず、実際、その流行唄の制作には数多くの無名の人々が関与した。前述の『東京風俗志 下の巻』は「巷歌の流行は、花柳の地に起り、或は菓子賣、豆賣、菓賣の如きが、市中を謡ひあるくに基し、或は特に読賣の謡ひ来れるによるもの多し」と説明している<sup>32)</sup>。また藤澤衛彦は1914年の時点で次のように述べている。

今でこそ、書生読賣の徒輩が、単なる小冊子に、其虚栄の名を明記するやうになつたけれど、それでさへ、大部分は、既に流行の先駆となつたもの、替唄を連記して、我は顔に其流行先駆の名を専らにせんと争ふに過ぎない、だから、其作者に於ても、淵源地に於ても、多く低級の種類に属し、作者は、特に全く藝術の世界から遠ざかつてある種の者によつて作成され、淵源地に於ても、下層部から、中流に傾向するの態を有してゐる<sup>33)</sup>。

ここで、流行唄の作者について「低級の種類に属し」、その「淵源地」は「下層部」と述べているのは、公娼や私娼など、社会の中で「低級」と差別されている花柳界の女性たちを含む貧困層が作者であつて、遊廓やその周辺の私娼街からそれが流行し始めたことを意味している。本稿もまた、ストライキ節の替え唄が作られる過程には無名の娼妓や芸妓らが関わり、遊廓の周辺からそれらが広まったと考えるものである。

しかし戦後の先行研究には、ストライキ節の歌詞の作者は無名の娼婦たちではなく演歌師の創作だったと見なすものが少なくない<sup>34)</sup>。そしてその多くは、演歌師・添田啞蟬坊（以下、啞蟬坊と略記）の息子である添田知道の著作から影響を受けたと考えられる。前述の『日本民謡大事典』も、ストライキ節の「元歌」は、横江鉄石・不知山人（＝啞蟬坊）合作の唄だと記している<sup>35)</sup>。その啞蟬坊らが作った歌詞とされているのは、下記のようなものである。特に一つ目の歌詞は、現在、ストライキ節の代表作として広く紹介されている<sup>36)</sup>。

自由廃業で廓は出たが ソレカラナントシヨ 行き場ないので屑拾ひ  
ウカレメノ ストライキ サリトハツライネ テナコトオッシャイマシタカネ<sup>37)</sup>

高利貸でも金さへあれば コリヤマトナントシヨ 多額議員でデカイ面  
アイドンノーダスライキ サリトハツライネ テナコトオッシャイマシタカネ<sup>38)</sup>

工事誤魔化しお金を儲け コリヤマトナントシヨ 藝者ひかして膝枕  
シューワイノ シリワレテ サリトハツライネ テナコトオッシャイマシタカネ<sup>39)</sup>

しかし啞蟬坊自身は、自伝である『啞蟬坊流生記』（1941年）の中で、自らをストライキ節の作者だとは述べておらず「作替をした<sup>40)</sup>」と記しており、上記の歌詞を、元唄ではなく替唄として紹介している。その説明の箇所を以下に引用したい。

此の時、救世軍の自由廃業運動が起ると前後して、ストライキ節が流行つた。熊本の東雲楼に娼妓の罷業が行はれ、そこから起つたといふので東雲節とも謂はれた。（私は一昨年九州遍路の途、東雲楼にも立ち寄つて見たが、今は此の事も傳説となつてゐて真相は掴みがたかつた。（中略）一般には、「何をくよくよ川端柳、水の流れを見てくらす」の古い歌詞が、代表的にうたはれてゐた。私は横江鐵石と合作で次の作替をしたが、冒頭のものがいづまでもうたはれてゐた<sup>41)</sup>。

啞蟬坊はここで熊本説を紹介した上で、その熊本説の真相は掴みがたいものだとしている。そして熊本以外の地域が発祥である可能性については一切言及していない。この記述からわかるのは、啞蟬坊が1900年当時のストライキ節の発祥についての情報をほとんど持っておらず、ようやく1930年代末になってから熊本説を確かめるために熊本の東雲楼を訪れたという事実である。

ところが、この『啞蟬坊流生記』が1982年に刊行された『添田啞蟬坊・添田知道著作集』の第1巻に収められた際には、上記の引用の箇所が、次のような表現に、大きく書き換えられているのである。

この時、救世軍の娼妓自由廃業運動が起つた。私は横江とストライキ節を共作したが、これが大流行になった。自廃運動が全国的にひろがるのと一緒に勢ひで流行し

たが、「何をくよくよ川端柳水の流れを見てくらす」の歌詞がよく歌はれたのは、曲の原型歌詞でドンドン節といふのがあったからである。後年、東雲楼の娼妓がストライキをやったのでこの歌ができたといはれたり、それにも名古屋説と熊本説があったりしたのは面白いことだ。後、名古屋説は否定され、熊本の方に旗があがったやうだが、私は九州遍路の途、東雲楼の跡にも立ち寄ってみた。が、娼妓ストライキの真相はつかみがたい伝説になってゐた<sup>42)</sup>。

この『著作集』所収の版では、もともと啞蟬坊らがストライキ節の「作替」をしたと書かれていた箇所が「共作」に書き換えられており、あたかも啞蟬坊らが元唄の作者であったかのような印象を与える表現になっている。啞蟬坊が東雲楼を訪問した時期がかなり遅かったことについての記載も『著作集』の方では削られている。さらに荒瀬豊による『著作集』の「解説」には「日清戦争のころから、彼はさまざまなペンネームを使って、自作を歌いはじめていた。作者も予期していなかったほどの大ヒットとなったのは、横江鉄石との合作「ストライキ節（別称、しのめ節）」だった」（傍点筆者）と記されており<sup>43)</sup>、この『著作集』だけを読んだ読者は、啞蟬坊が1900年から大流行したストライキ節の元唄の作者だと自ら証言したかのように誤解するだろう。

啞蟬坊がストライキ節の「作替」をしたのがいつ頃のことかは定かでないが、前述の『流行唄変遷史』（1914年）は、久保田鬼石、尾上酔郷、啞蟬坊らが書生節や東雲節などを読売したことについて「影響もなく、傳播もなくして過ぎた」と評している<sup>44)</sup>。1915年に刊行された高野斑山・大竹紫葉共編『俚謡集拾遺』では、収められた「東雲節」の10の歌詞の中に、啞蟬坊作とされる歌詞やそれに類似する政治性の強い歌詞は一つも含まれていない<sup>45)</sup>。次節でも論じるとおり、1900年当時にストライキ節として流行した歌詞には、啞蟬坊の作った歌詞に特徴的に見られる貧困や政治の腐敗等の社会問題を扱うものはほとんど見出せず、ほぼ一様に、恋愛感情と結婚願望が唄われたものであった。この『俚謡集拾遺』所収の「東雲節」の10の唄の全てに含まれている「コガル、何トシヨ」「別れが何トシヨ」という箇所に端的に表れているように、それらの唄は、間夫に恋焦がれる思いやその人と朝に別れる辛さを、どうすればよいのかと唄うものだったのである。したがって、啞蟬坊の作ったストライキ節の替え唄が1900年当時に流行したという説は疑わしく、そうした流行の事実を示す根拠は、これまでも示されていない。

また、啞蟬坊が作ったとされる「自由廃業で廓は出たが（中略）行き場ないので屑拾

ひ」という歌詞についても、彼自身の独創であったかどうか疑わしい。1900年11月29日の『東京朝日新聞』には、次のような記事が掲載されている。

今の自由廃業娼妓は年若の癖に終りを完うせず大概の者は地獄となり甚だしき者は窃盗を働くと聞いて吉原仲の町の老妓小せん大いに慨歎し（中略）昨今廓内にて流行するストライキ節に倣つて左の如き小唄を新作したり

「自由廃業したのはよいがナントシヨ 惚たお方に宅がない 志のゝめのストライキ

「思ひおもふて廃業したがナントシヨ ぬしと二人で屑拾ひ 志のゝめのストライキ<sup>46)</sup>（傍点筆者）

この『東京朝日新聞』の記事に掲載された「屑拾い」の歌詞は、啞蟬坊作とされる唄と酷似しているが、報じられた時期から見て、先に作ったのは明らかにこの「小せん」という名の「老妓」であろう<sup>47)</sup>。自由廃業をしても貧しさゆえに住まいを得られず「屑拾い」で生計を立ててゆくというストーリーは、たとえ遊廓から脱出できたとしても前借金の返済は求められるため極度の貧困から抜け出すことはできない厳しい状況を風刺したものであった。この『東京朝日新聞』の記事からは、遊廓の女性たちがそのように自ら流行唄の歌詞を「新作」していたことが確認できる。

娼妓たちによる流行唄の制作の様子は、『九州日日新聞』の記事からも知ることができる。ただし、自由廃業運動が東京から全国へ広まりつつあった1900年の夏から秋にかけて、『九州日日新聞』に掲載された流行唄はストライキ節ではなく、法界節、情歌（都々逸）、磯節、天津絵節等であった。『九州日日新聞』は民謡の盛んな熊本で発行された新聞だけあって、「花ふゞき 粋の栞 絃の調」と名付けられた欄で、読者からの歌詞の投稿を募っていた。その選定は「もやし（坊）」と名乗る男性編者が担当しており、掲載する作品の一部にコメントをつけていた。もやし坊は遊廓の女性たちから絶大な人気を集めていたようで、1900年10月には、二本木遊廓にもやし坊の偽物が現れたという記事が掲載されている。その「贗モヤシ先生」は流行唄に詳しく、自らも上手に唄い、「我こそ當時日々新聞紙上に粋名を轟かしたるモヤシ坊と云へる男なり杯と嘘八百を並べ立て、」「日本一の色男を気取っていたのだという<sup>48)</sup>。もやし坊の人気は、「花ふゞき 粋の栞 絃の調」欄における彼と娼妓らとの掛け合いの様子からも読み取ることができる。唄に「もやしさまへ」と宛名が付された投稿もあり、もやし坊の褒め

言葉やコメントを楽しみにして作詞に励んでいた様子がかがえる。

たとえば二本木遊廓の「小鹿」が法界節として投稿した「三橋の下を流るゝ川竹の、憂節しげき勤めして、鱈や鯰の餌となる、苦勞も恋しい主の爲め」という唄には、「もやし曰く。年が明たら極楽だよ。」というコメントが付いている<sup>49)</sup>。これは、小鹿という娼妓が、好きでもない男たちに性を売る苦しみを、間夫との恋によって何とか耐え忍んでいるということを唄ったのに対して、もやし坊が、年期が明けて遊廓を出た暁にはきっとその「恋しい主」とともに暮らす「極楽」が待っているだろうと述べて小鹿を励ましているのである。他方、同じように間夫との恋や結婚願望を表したものでも「いづみの湧く様にお金もちて、ぬしと気儘に暮したい」と唄う娼妓には「もやし曰く。慾の深い女だね」とからかうなど<sup>50)</sup>、娼妓たちともやし坊との間では、唄とコメントとのやりとりそのものを面白がっている様子も見られる。

こうして、もやし坊が励まし言葉をかけたり粋なコメントを付けたり、投稿された唄を「面白い」「うまいまい」と褒めたりすることに促されて、二本木、人吉、牛深、大牟田などの熊本周辺の各地から、遊廓内での出来事や思いを表現した女性たちの唄が『九州日日新聞』に投稿され続けた。それらの投稿にはペンネームが用いられたが、その内容から推して、遊廓内の女性たちの投稿が多かったといえる。実際に掲載に至ったのは投稿された唄の一部に過ぎないため、遊廓内では少なからぬ女性たちが作詞をしていたと考えられるのである。

ストライキ節以外の流行唄の歌詞にも、自由廃業運動の影響は及んでいた。「花ふゞき 粋の葉 絃の調」の欄では、1900年10月2日に「『この頃は、とんとお客がなかいても、ろうしゆかうしゆも案ぜずに、あいたいこひもこちのまゝこれが、枯木に花だろばい』自由廃業」という唄が掲載され、「もやし曰く。娼妓自由廃業の歌も時のもので面白い、皆さんどしどしおやんなさい」というコメントが付いている<sup>51)</sup>。ストライキ節が『九州日日新聞』に掲載されるのは前述のとおり12月に入ってからのものであったが、その熊本でも、別の流行唄の形で自由廃業が唄われることは、ストライキ節が熊本で流行するよりもずっと早い時期からあったのである。

熊本に限らず全国的に見ても、ストライキ節以外の様々な流行唄の形をとって、自由廃業が唄われていたと考えられる。つまり東京から広まったストライキ節だけが自由廃業の唄ではなかったのである。筆者は1900年9月29日の『河北新報』（仙台）にも、磯節として自由廃業が唄われていることを報じた下記の記事を見つけた。

磯ぶし 娼妓自由廃業につれ或る地方にては昨今左の磯ぶし流行せりと  
娼妓何時でも廃業が出来る、サイショ子、残る前借苦にならぬ、残る子、前借イソ  
貸と借、テヤテヤテヤ、聊か安心、廃業の性自由で来い、届書の性連署で来い、拒  
絶の性理由で来い、正業の性独立で来い、返済の性月賦で来い、手続の性委任で来  
い、警察許可する、廃娼も実行、ソコで楼主がイソ御心配<sup>52)</sup>

磯節そのものは自由廃業運動以前から広く唄われていたが、その節に乗せて、自由廃業が唄われたのである。そのように唄の歌詞の中で「自由廃業」「届書」「警察許可する」「廃娼」等の言葉が用いられることは、娼妓や芸妓たちの間で自由廃業の基礎知識を伝えあうのに効果的であったろう。

1900年前後の時期には、日本の各地で唄われるようになった流行唄が他の地方へと伝播されていく過程において、新聞だけでなく、法界屋の役割や唄本などの出版物の役割も大きかったと考えられる。法界屋は「藝人の失敗者か香具師の類」であると言われ、「琴、尺八、蛇皮線、提琴などの大一座」で、必ず「興行物の太夫、地を弾く囃し方、及び淫賣奴専門の女等」を連れて<sup>53)</sup>遊廓近辺にも出入りしていた<sup>54)</sup>が、法界屋が興行のために移動すること<sup>55)</sup>によって唄の情報が広く各地に伝えられただけでなく、法界屋自身もその作詞の過程に加わっていた可能性がある。唄本等の出版物もまた、刊行された場を起点として、唄の情報を全国へ広めた。

しかしどのような唄も、唄う人の実感が伴うことによって初めて流行するものである。音楽史研究の先駆者とも言われる鈴木鼓村は、1913年の著書の中で「好事の音楽家らは、密かに俗謡を製作つて世に流行らせやうと努めたが駄目であつた。それはつまり流行唄なるものは國民自然の聲で、人力の如何ともすることの出来ない神秘の力がそのうちに籠つてゐるからであらう<sup>56)</sup>」と述べている。ストライキ節についていえば、自由廃業の当事者である娼妓や芸妓たちこそが、その自由廃業の意味を実感として知っていたのであり、真に流行したのは、娼妓や芸妓の「自然の聲」であったと考えられる。その流行の過程には、新聞記者、演歌師、法界屋等を含む、遊廓内外の様々な人々が関与していたが、娼妓や芸妓らの思いを表現する唄は、遊廓の外から意図的に流行らせようとして流行るようなものではなかった。ストライキ節の流行は、男性演歌師の歴史としてではなく、第一に、遊廓内の女性たちの創作活動の歴史として捉えられるべきなのである。

### 3 歌詞に込められた娼妓・芸妓らの願い

遊廓やその周辺で作られた唄の制作には娼妓や芸妓ら「低級の種類」として差別されていた女性たちが関与していたために、その内容は「鄙猥なるもの」とみなされて、今日に至るまで、真剣な研究の対象とされることはほとんどなかった。

ストライキ節が流行り出した1900年当時、流行唄は「俗謡」「俗曲」とも呼ばれていたが、特に「猥褻俗謡」とみなされた場合には、同年に制定されたばかりの治安警察法の第16条に該当するものとして警察による取締の対象になった<sup>57)</sup>。また、教育の場では、子どもたちがそれらの唄を真似して歌うことが警戒され、「俗曲および俚謡の如き鄙猥なるもの」は「校の内外を問はず、之れを口にすることを厳禁すべし」と定められた<sup>58)</sup>。

しかし実際にストライキ節の歌詞の内容を調べてみると、「猥褻」「鄙猥」という言葉から想像されるような性的な表現はほとんど見当たらない。むしろ、純真ともいえるべき恋愛感情が、日常の情景を描き出す中で唄われているのである。時には皮肉や自暴自棄な気持ちが表現されることもあるが、多数の男性たちと性行為をし続ける娼妓稼業が肯定されることはなく、一貫して、真剣な恋の相手との一対一の関係性への渴望が唄われていた。そして、恋をする自分たちの姿を描き出すことを通じて、間接的に、その関係性の構築を常に脅かしていた遊廓の実態を批判したのである。以下は、1900年から1901年に刊行された前述の5冊のストライキ節の唄本に収録された計309の歌詞の中から、当時のストライキ節の特徴が典型的に現れているものを選び出して紹介するものである。

娼妓たちは、その娼妓としての立場ゆえに、たとえ間夫に会えたとしても朝には別れなければならず、ストライキ節にはそうした別離の悲しみを唄ったものが多い。客は連泊（「居続」）することも可能だが、それを続けることが経済的に可能な客は限られていた。とはいえ男性客側は、金銭さえ用意できれば娼妓と会う日時を自分で決めることができたが、娼妓側は間夫の都合に合わせるほかなかった。そのため、ストライキ節の中では「別れ」「帰す」「逢ぬ<sup>あわ</sup>」や、朝の別れを暗喩する「(夜) 明の鐘」「明鴉<sup>あけがらす</sup>」などの言葉が最も多く用いられた。たとえば、1900年12月発行の唄本『新版ストライキ節』では、収録された104の唄の全てに「別れ」という言葉が含まれていた<sup>59)</sup>。

一夜<sup>あは</sup>遇ぬを怨むも道理 別れが何んとしよ 二度と一世に無い月日  
東雲の明鴉 さりとは辛い子 てなこと仰有ましたよ<sup>60)</sup>

とめたい思ひが天まで届き 別れが何んとしよ ぬしを帰さぬ今朝のあめ  
東雲の明鴉 さりとは辛い子 てなこと仰有ましたよ<sup>61)</sup>

とめて嬉しと又考がへて、こがるゝ何んとしよ、帰さにや成らない義理もある、  
東雲の明け方に、別れは辛いね、テナコト、ヲツシヤリマシタ子<sup>62)</sup>

娼妓たちは、そのように常に別れを強いられる娼妓と客との関係性を嫌がり、好きな人との結婚を強く望んでいた。唄の中では「添ふ」「女夫」「女房」「花嫁」等の言葉を用いたり、娼妓や芸妓を廃業した後の二人の夢の暮らしの具体的情景を描いたりすることによって、その結婚願望を表現していた。

早く<sup>ねんあけめしたき</sup>年明飯焚ならいコガル、ナントシヨ三味線もつ手で<sup>み</sup>味そをする  
東雲ノストライキ去リトワつらいネツテナ事ヲツシヤリ升タネ<sup>63)</sup>

羽織たゝんでたんすへしまい 別れが何んとしよ せめて一夜の女房役  
東雲の明鴉 さりとは辛い子 てなこと仰有ましたよ<sup>64)</sup>

世間はれては云はないけれど、俺<sup>わた</sup>しやなんとしよ、頓<sup>やが</sup>て女房は胸ずもり、  
東雲のストライキ、さーりとは辛いね、テナコトヲツシヤリマシタカ子<sup>65)</sup>

はが<sup>はが</sup>の<sup>のぼ</sup>ば 羽ひ延して気も晴々と、コガル、ナントシヨ、何<sup>ど</sup>處<sup>こ</sup>へ幾<sup>め</sup>世<sup>おと</sup>の女夫鶴。  
シノ、メノストライキ、サリトハツライ子テナコトヲツシヤイマシタカ子<sup>66)</sup>

このような結婚願望は、恋の相手と一対一の永続的な関係を結びたいという願いであった。そしてその思いは、娼妓や芸妓として数多くの男性との性行為を強いられる自らの「勤め」に対する嫌悪感と表裏一体であった。

ぬしの他には蚊<sup>びき</sup>の一疋も、これから何んとしよ、入れぬ<sup>か</sup>心<sup>や</sup>で釣た蚊屋、

東雲のストライキ、さーりとは辛いね、テナコト、ヲツシヤリマシタカ子<sup>67)</sup>

早く三筋の勤めを<sup>や</sup>巳めて 之から何んとしよ 思ふ一筋通したい  
東雲のストライキ 待つ間は辛いね テナコトヲツシヤリマシタカ子<sup>68)</sup>

つらや義理から笑顔をつくり 別れが何んとしよ 隠すなみだのうき（憂き）勤め  
東雲の明鴉 さりとは辛い子 てなこと仰有ましたよ<sup>69)</sup>

契る百年八千代はおろか 別れが何んとしよ ならば世界の絶ゆる迄<sup>まで</sup>  
東雲の明鴉 さり<sup>ママ</sup>さは辛い子 てなこと仰有ましたよ<sup>70)</sup>

こうしたストライキ節の歌詞の内容を全体として俯瞰する時に気づかされることは、当時の娼妓や芸妓たちにとって、特定の男性との関係がいかに重大な関心事であったかということである。彼女たちは貧困の怖さを実感として知っていたが、お金か一対一の関係性か、どちらかを取らねばならない時には後者を取ると唄ったものもある。

川竹ながらも節あるわたし、迷はぬ何んとしよ、金で操はかへやせぬ、  
一筋の女気は、思へばつられね、テナコト、ヲツシヤリマシタカ子<sup>71)</sup>

意気な櫻の一枝よりも 別れが何んとしよ じみな松葉の末ながく  
東雲の明鴉 さりとは辛い子 てなこと仰有ましたよ<sup>72)</sup>

しかし他方で、自由廃業をした後に結婚の夢が叶ったとしても、かえって貧困ゆえに不幸になるのではないかと不安を表した唄もあった。また、廃業後には男性との出会いの機会が失われるのではないかとこの恐れを表現した唄もあった。

なまじ自由をとへんよりも、これから何んとしよ、言はぬ昔しが増だらう、  
廃業し主の側貧乏は辛いね、テナコトヲツシヤリマシタカ子<sup>73)</sup>

藝者止られよか止られよか藝者コガル、ナントシヨ藝者すりゃこそ<sup>あい</sup>合もする  
東雲ノストライキ去リトワつらいネツテナ事ヲツシヤリ升タネ<sup>74)</sup>

楼主らは、娼妓や芸妓らの多くが将来の結婚を最後の頼みの綱としていることをよく知っていたので、ある楼主は、娼妓らの自由廃業への意欲を削ぐために彼女たちを集めて「娼妓を廃業しても人の奥様にも権妻にも滅太にはなれない、たとえなられても楼主に対し借金ある以上は何処へ行っても借金を催促されたり財産を差押へられたりするからお前たちの身に取つては猥りに廃業せぬ方が利益なり」と説教したという<sup>75)</sup>。このような自由廃業妨害は全国的に行われており、楼主らの言動に不安にさせられて自由廃業を思いとどまる娼妓や芸妓も少なからずいた。

ストライキ節の中には、自由廃業に対する不安や否定的な考えが示されることもあり、必ずしも全てが、自ら自由廃業を実行するという前提に立って唄われたものではなかった。それらの唄の歌詞は、確かに「ストライキ」=自由廃業の時代を唄ったものではあったが、自由廃業という新しい選択肢を前にして、娼妓や芸妓としての自分自身の姿をふりかえり、その悲哀を表現したものでもあった。309の唄のうち、「苦労」という語が含まれたものが18、「涙」や「泣」が11、「恨」「うらむ」が8あり、その他にも「憎む」「諦め」「淋しい」「未練」「気兼ね」「思案」「寝られぬ」「癩」などの言葉が用いられて、心の苦しさを唄うものが多かった。そして実に45の唄の中に「主」「ぬし」という言葉が使われていることからわかるように、彼女たちの物思いは恋の相手との関係性に向けられていた。

そのような彼女たちにとって、最も嫌悪すべきは、自分と間夫との関係を邪魔するものであった。そして遊廓という彼女たちの外出を阻む仕組みや楼主の利益優先の態度は、憎むべき最大の障碍であった。それゆえに自由廃業運動は、彼女たちの恋の成就に役立つ場合には特に強く支持された。ストライキ節に表現された遊廓内の女性たちの思いは、公娼制度の差別性に対する廃娼運動家らの義憤やその背後にあったキリスト教信仰とは性質を異にしていたが、他者から強制される性的関係を厭い、自らが真に望む関係性を生きたいと願ったその思いこそが、自由廃業の新時代の到来を唄に乗せて全国へと伝えた原動力だったのである。

### おわりに—女性たちの唄に内包された社会変革の力

ストライキ節が全国的に流行したことの意義は、第1に、娼妓や芸妓を主体とする表現が、自由廃業運動と連動して生み出されたことにあった。彼女たちが普段の稼業を通じて馴染んだ唄という方法によって、「わたし」を主語とする彼女たちの声が全国に伝

えられることになったのである。貧しさゆえに教育を受けられず「手紙では字が読めぬわたしゃ辛いね<sup>76)</sup>」と嘆く女性であっても、唄を通じてならば、そのような自分の思いを伝えることができた。

第2の意義は、ストライキ節が、次々に替え唄となって遊廓の女性たちの中で連鎖して唄い継がれたことによって、彼女たちの間に唄を通じた緩やかな繋がりが作り出されたことである。ただ個々人の苦しみが言葉として表現されただけでなく、別の誰かに共感をもって唄われることによって広まっていったという点が重要である。なぜならストライキ節は、遊廓内の女性たちの底なしの孤独を表現したものであり、その孤独からの解放こそが、彼女たちの望みだったからである。親に売られながらも「親のためだと苦界も勤め<sup>77)</sup>」、客との関係には「飽られるのが仕舞の落よ（中略）どうせ當座の花だもの<sup>78)</sup>」と白けてみせて、それでも諦めきれない他者との繋がりへの期待が、結婚願望として表現されていた。彼女たちが恋の相手に向けて「何ぞ私も見捨ずに<sup>79)</sup>」と唄うのは、それまでずっと何者からも捨てられ続けていたからだだろう。しかしそのような深い孤独が、個人的なものではなくて、遊廓で生きる女性たちに共通する経験であると知った時、わずかながらもその孤独の苦しみは緩和されたはずである。

第3の意義は、自由廃業運動が始まった時期に特に盛んに論じられていた人権という言葉の意味が、娼妓や芸妓ら自身の経験に即した具体的な表現によって唄の中で示され、広く伝わっていったことである。遊廓内の女性たちにとって、自由廃業運動で唱えられた人権とは、何よりも、望まぬ性行為を強要されないことであり、恋する人に会いに行ける自由のことであった。

束縛なしたる花園よりもコガル、ナントシヨ自由に咲たる野邊の梅  
東雲ノストライキ去リトワつらいネツテナ事ヲツシャリ升タネ<sup>80)</sup>

このように娼妓や芸妓らが性の自由を求めた声は、「下劣なるもの」と時に軽蔑されながらも、花柳界だけでなく広く社会に浸透していった。それは、彼女らの素朴な訴えに、自由廃業の本質的な重要性が感知されたからではなかっただろうか。自由廃業運動が全国に広まったのは、その基底に、解放の当事者である女性たちの声が響いていたからだと考えられるのである。

## 注

- 1) 鈴木武三郎編 (1900)『ストライキ志のゝめ節』文友堂, p.4。
- 2) 鈴木與八編 (1901 a)『東雲ふし 流行ストラキキ』鈴木與八 (盛陽堂), p.4。
- 3) 拙稿 (2020)「小澤三郎編 U. G. マーフィー (モルフィ) 関連自由廃業運動史史料 (1) —マーフィーによる最初の自由廃業訴訟に関する史料と娼妓・佐野ふでの手紙」『キリスト教社会問題研究』第69号, 参照。
- 4) 自由廃業運動の概要や自由廃業の当事者 (娼妓や芸妓) と自由廃業運動の捉え方の相違については, 拙著 (2017)『性を管理する帝国—公娼制度下の「衛生」問題と廃娼運動』(大阪大学出版会)の第5章1 (pp.223-228)を併せて参照されたい。
- 5) 平出鏗二郎 (1902)『東京風俗志 下の巻』富山房, pp.159-161。
- 6) 仲井幸二郎・丸山忍・三隅治雄 (1972)『日本民謡辞典』東京堂出版, pp.173-174。
- 7) 前掲注3)。
- 8) 新谷周蔵編 (1931)『熊本案内』熊本地歴研究会, p.67。
- 9) 原田碧波編 (1959)『唄の観光 肥後民謡』熊本政治新聞社, pp.16-17。
- 10) 1900年10月31日の『九州日日新聞』には「南廓娼妓の自由廃業騒ぎは玉新楼を以て魁がけとし同楼の若龍, 小徳, 松子の三名を以て率先者としたるも (後略)」と記されている (「玉新楼の自由廃業」『九州日日新聞』1900年10月31日3面)。そしてその玉新楼の松子の自由廃業の届け出は, 1900年9月27日であったと報じられている (「自由廃業と南廓 (10)」『九州日日新聞』1900年9月29日3面)。なお, この3名はたしかに廃業届を出したものの楼主等に妨害され, 10月31日の時点でも, まだ廃業できていなかった (前掲「玉新楼の自由廃業」)。
- 11) 「南廓自由廃業」『九州日日新聞』1900年11月6日3面。
- 12) 前掲『東京風俗志 下の巻』p.159。
- 13) 沖野岩三郎 (1930)『娼妓解放哀話』中央公論社, p.3。
- 14) 同前, pp.130-134。
- 15) 竹村民郎 (1982)「解説」, 沖野岩三郎『娼妓解放哀話』中公文庫, p.326。
- 16) 水野公寿 (1999)「東雲のストライキ考」『市史研究くまもと』第10号, 熊本市, p.53。同「東雲のストライキ」(第3編第3章第2節第2項)新熊本市史編纂委員会編 (2001)『新熊本市史 通史編第6巻近代Ⅱ』熊本市, pp.393-413。
- 17) 浅野建二編 (1983)『日本民謡大事典』雄山閣出版, p.252。
- 18) 藤澤衛彦 (1914)『流行唄変遷史』有隣洞書屋, p.330。
- 19) 藤澤衛彦 (1929)『明治流行歌史』春陽堂, p.352。
- 20) 前掲注3)。
- 21) 「新吉原の流行唄」『新愛知』1900年10月19日4面。なお, 『新愛知』では, 同年11月10日 (4面)と12月9日 (4面)にも, 同じ囃子詞の唄が紹介されているが, その唄の名称は「ナントシヨ節」となっている。「目下花柳界にて大流行の, 何をくよくよ川端柳焦るゝナントシヨと云ひつる變調」として, 11月10日に1名, 12月9日に2名の作

った「ナントシヨ節」の替え唄が紹介されている。同じ時期に東京では「ストライキ節」や「東雲節」として流行していた唄が、名古屋では「ナントシヨ節」と呼ばれていたことから、名古屋がストライキ節の発祥地であるとの通説は間違いだったと言える。

- 22) 「小題大做」『二六新報』1900年10月29日2面（不二出版の復刻版（1992年）参照）。
- 23) 「東雲」を場所や団体の名前と捉えた説として、「東雲楼」に関するもの以外では、名古屋の「東雲連」を意味していると論じるものがある（下八十五（2014）『娼妓たちの目覚め 明治末期の自由廃業運動』幻冬舎ルネッサンス、pp.306-312）。同書は、前掲藤澤（1914、注18）に基づき「東雲節の母体は古くから名古屋で唄い継がれていた俗謡」だと述べた上で、「その俗謡に東雲連の芸妓が三味線の糸に乗せて広め」て「それを街頭演歌師の添田啞蟬坊あたりが、さらに、それに新時代の思想を盛り込んだ詞を次々と作詞し（中略）熱狂的に世間に迎えられた」と主張している。しかしその「東雲連」説の根拠とされているのは、1900年当時の史料ではなく、1932年に刊行された『大百科事典』第6巻（平凡社）である。そしてその『大百科事典』にも「東雲連」説の論拠となる史料は示されておらず、その説の信憑性は低い。本稿2で明らかにしたとおり、ストライキ節を添田啞蟬坊が流行させたという添田説にも史料の裏付けがない。
- 24) 「壮快なる自由廃業（一隊の娘子軍）」『二六新報』1900年10月25日5面。
- 25) 「ストライキ節」『婦人と子ども』第1巻第4号（1901年4月）、フレーベル会、62頁（お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション TeaPot から2021年3月27日最終閲覧、<https://teapot.lib.ocha.ac.jp/records/33381#.YF5WHC33KS4>）。
- 26) 前掲『ストライキ志のゝめ節』、p.1。
- 27) 前掲『東雲ふし 流行ストライキ』、p.1。
- 28) 前掲『ストライキ志のゝめ節』を刊行した文友堂の所在地は東京市日本橋区馬喰町である。盛陽堂から1901年1月に刊行された3種のストライキ節の唄本の発行所は東京市浅草区南元町である。国立国会図書館デジタルコレクション所収の1900年12月20日発行の唄本『新版ストライキ節』（大高榮編、大高榮発行）は東京市神田区猿楽町で発行されたものである。
- 29) 「花ふぶき 粹の葉 絃の調」『九州日日新聞』1900年12月9日3面。
- 30) 同前。
- 31) 同前。この記事に掲載された歌詞は、「隠して置きたい帽子や傘を、出してナントシヨ、進まぬ主をば帰しやる、東雲のストライキ、サリトハツライ子、ヨツケナコトオッシャイマシタカ子」「ぬし三橋こそ来て下さんせ 来ずにナントシヨ、欺して来ぬにも程がある、東雲のストライキ、サリトハツライ子、ヨツケナコトオッシャイマシタカ子」というものである。同年12月14日にも別のストライキ節が紹介されたが、末尾の囃子詞の部分は、やはり「ヨツケナコトオッシャイマシタカ子」となっている（「花ふぶき 粹の葉 絃の調」『九州日日新聞』1900年12月14日3面）。
- 32) 前掲『東京風俗志 下の巻』p.156。

- 33) 前掲『流行唄変遷史』p.4。
- 34) たとえば、前掲水野「東雲のストライキ考」は、「演歌師はどんだん節をもとに奇抜な囃子詞をつけストライキ節を創作した。演歌師はそれを街頭で唄い、歌詞を印刷した小冊子売り生計をたてていた(中略)そうするとストライキ節は口伝えに民衆の間に流行し、民衆自身も替歌を作っていたのである」(p.53)と述べて、「演歌師」がその流行を作り出したように論じている。最近の音楽史研究においても、ストライキ節は「啞蟬坊作の「ストライキ節」と紹介されている(細川周平『近代日本の音楽百年—黒船から終戦まで』第1巻、岩波書店、2020年、296頁)。
- 35) 前掲注17)。
- 36) 流行唄の研究としては、論文や書籍で歌詞だけを紹介したものよりも音源が共に提供されたものの方が社会的影響力が大きかったと考えられるが、レコード版の『ほるぷ歌謡百年 明治編1』(ほるぷレコード、1973年)に収録されたストライキ節は「鉄石、不知山人・作詞作曲」とされる「自由廃業で廓は出たが…行き場ないので屑拾ひ」の歌詞であり、比較的最近のCD版『歌と音でつづる明治』(キングレコード、2008年)も同様である。これらのレコードおよびCDは共に添田知道が制作と監修にあたったものであった。
- 37) 添田啞蟬坊(1941)『啞蟬坊流生記』那古野書房、pp.136-137。
- 38) 同前、p.137。
- 39) 同前、p.138。
- 40) 同前、p.136。
- 41) 同前、pp.135-136。
- 42) 添田啞蟬坊(1982)『添田啞蟬坊・添田知道著作集1 啞蟬坊流生記』刀水書房、p.101。
- 43) 荒瀬豊(1982)「解説 啞蟬坊とその思想」前掲『添田啞蟬坊・添田知道著作集1 啞蟬坊流生記』p.335。
- 44) 前掲『流行唄変遷史』p.333。
- 45) 大竹紫葉編(1915)「附録明治年間流行唄」高野斑山・大竹紫葉共編『俚謡集拾遺』六合館、pp.72-74。
- 46) 「老妓小せんの筆ずさみ」『東京朝日新聞』1900年11月29日5面。
- 47) 本稿の3で後述するように、ストライキ節の特徴は、恋の相手である「主(ぬし)」との関係性が唄の中心テーマとなっていることである。小せんの作った唄には「惚たお方」が登場し、自由廃業も、その二人が「思ひおもふて」したことであり、「屑拾ひ」も「ぬしと二人で」する行為として描かれている。ところが、啞蟬坊作とされる歌詞には、そのような恋する誰かとの関係性を描く表現が全く見られない。そのような表現上の差異からも、流行当時のストライキ節の特徴を備えているのは、小せんの歌詞の方であるといえる。
- 48) 「自称色男の失敗(上)」『九州日日新聞』1900年10月6日3面、「自称色男の失敗(下)」『九州日日新聞』1900年10月9日3面。

- 49) 「花ふゞき 粋の葉 絃の調」『九州日日新聞』1900年10月27日3面。
- 50) 「花ふゞき 粋の葉 絃の調」『九州日日新聞』1900年11月27日3面。
- 51) 「花ふゞき 粋の葉 絃の調」『九州日日新聞』1900年10月2日3面。
- 52) 「磯ぶし」『河北新報』1900年9月29日3面。
- 53) 杉韻居士（1914）『東京の表裏八百八街』鈴木書店, pp.161-167。
- 54) 当時、法界屋が遊廓近辺を「徘徊」していたことは、複数の新聞記事から確認できる。  
例えば「明治法律学校生大いに吉原に闘ふ」『東京朝日新聞』1898年4月28日4面、  
「酔漢法界節を斬る」『東京朝日新聞』1900年5月8日5面。
- 55) 石田龍蔵によれば、法界屋は明治30年頃が最も盛んであり、「東京市中を流し廻つて最早人に飽れたと見たなれば地方へ出稼ぎに行く」と紹介されている（石田龍蔵（1934）『明治変態風俗史』宏元社書店, p.432）。
- 56) 鈴木鼓村（1913）『耳の趣味』左久良書房, p.180。
- 57) 「第二部長照会 蓄音器俗謡ニ関スル取締ノ件照会」警視庁第一部（1900）『警察要務』下巻, p.31。
- 58) 新清次郎（1903）『小学校唱歌教授法』敬文館, p.55。
- 59) 前掲『新版ストライキ節』。なお、収録された104の唄のうち2つの重複がある。
- 60) 同前, p.2。
- 61) 同前, p.23。
- 62) 前掲『東雲ふし 流行ストラキキ』, pp.19-20。
- 63) 前掲『ストライキ志のゝめ節』, p.7。
- 64) 前掲『新版ストライキ節』, p.11。
- 65) 前掲『東雲ふし 流行ストラキキ』, p.13。
- 66) 鈴木與八編（1901b）『当世流行ストライキ節』鈴木與八（盛陽堂）, p.27。
- 67) 前掲『東雲ふし 流行ストラキキ』, p.11。
- 68) 同前, p.7。
- 69) 前掲『新版ストライキ節』, p.13。
- 70) 同前, p.18。
- 71) 前掲『東雲ふし 流行ストラキキ』, pp.17-18。
- 72) 前掲『新版ストライキ節』, p.4。
- 73) 前掲『東雲ふし 流行ストラキキ』, p.28。
- 74) 前掲『ストライキ志のゝめ節』, pp.3-4。
- 75) 「奥様にも権妻にもなれぬ」『九州日日新聞』1900年10月26日3面。
- 76) 前掲『東雲ふし 流行ストラキキ』, p.12。
- 77) 同前, p.21。
- 78) 前掲『新版ストライキ節』, p.19。
- 79) 前掲『東雲ふし 流行ストラキキ』, p.14。
- 80) 前掲『ストライキ志のゝめ節』, p.17。